

平泉世界文化遺産推進調査特別委員会会議記録

平泉世界文化遺産推進調査特別委員長 及川 幸子

1 日時

平成 21 年 10 月 9 日（金曜日）

午後 3 時 9 分開会、午後 4 時 1 分散会

2 場所

特別委員会室

3 出席委員

及川幸子委員長、工藤勝子副委員長、伊藤勢至委員、渡辺幸貫委員、佐々木 博委員、佐々木順一委員、工藤大輔委員、新居田弘文委員、千葉康一郎委員、大宮惇幸委員、小田島峰雄委員、三浦陽子委員、関根敏伸委員、五日市 王委員、中平 均委員、菅原一敏委員、高橋昌造委員、喜多正敏委員、高橋 元委員、郷右近 浩委員、岩渕 誠委員、菊池 勲委員、佐々木大和委員、千葉 伝委員、小野寺研一委員、柳村岩見委員、平沼 健委員、嵯峨耄朗委員、高橋雪文委員、熊谷 泉委員、小野寺有一委員、吉田洋治委員、田村 誠委員、飯澤 匡委員、高橋博之委員、工藤勝博委員、小西和子委員、久保孝喜委員、木村幸弘委員、斉藤 信委員、小野寺 好委員、阿部富雄委員

4 欠席委員

樋下正信委員、亀卦川富夫委員、及川あつし委員

5 事務局職員

加藤担当書記、小原担当書記

浅田議事調査課総括課長、高橋政務調査課長、晴山主任主査、栗澤主査、大越主査

6 一般傍聴者

なし

7 会議に付した事件

(1) 調査

「推薦書暫定版の概要と岩手にとっての平泉」

講師 平泉の文化遺産世界遺産登録推薦書作成委員会 委員長 工藤雅樹氏

(2) その他

次回の委員会開催について

8 議事の内容

○及川幸子委員長 ただいまから平泉世界文化遺産推進調査特別委員会を開会いたします。

なお、樋下正信委員、亀卦川富夫委員、及川あつし委員は欠席とのことですので、御了承願います。

これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付いたしております日程により会議を行います。

これより推薦書暫定版の概要と岩手にとっての平泉についての調査を行います。

本日は、講師として平泉の文化遺産世界遺産登録推薦書作成委員会委員長、工藤雅樹先生をお招きしておりますので、御紹介いたします。

工藤先生の御略歴につきましてはお手元に配付しているとおりでございます。

本日は推薦書暫定版の概要と岩手にとっての平泉と題しまして、先般ユネスコ世界遺産センターに提出されました推薦書暫定版につきまして旧推薦書との違いなど、その概要をお話しいただくとともに、岩手にとって平泉とは何かをお話しいただくこととしております。

工藤先生には御多忙のところ御講演をお引き受けくださいます、まことにありがとうございます。改めて感謝申し上げます。また、工藤先生のお話の後、教育委員会から今後のスケジュールなど若干の説明を受けることとしておりますが、後ほど一括して質疑、意見交換の時間を設けたいと思いますので、御了承願いたいと思います。

それでは、工藤先生よろしく願いいたします。

○工藤雅樹講師 工藤雅樹でございます。きょうは、推薦書暫定版の概要、それから岩手にとって平泉とは何か、この二つのテーマでお話し申し上げたいと思います。

最初に、自己紹介的なことから入ろうと思うのでありますが、お手元に私の履歴のようなものが配付されているようでございます。私は、小学校は盛岡市の城南小学校、中学校は盛岡の附属中学校でございまして、それで大学に入るまで盛岡にいました。現在も盛岡市内の高松四丁目に家がございます、仙台と盛岡を行ったり来たりしているというようなことございまして、住民登録は仙台でございますけれども、気持ちの上では岩手県人、盛岡人のつもりでございます。よろしく願いいたします。

さて、まずは新旧推薦書の比較ということで新しい推薦書では前の推薦書とどのような部分が改められたのか、お手元の資料でも十分におわかりのこととは思いますが、まずはそのあたりのことからお話ししたいと思います。

前の推薦書では、「浄土思想を基調とする文化的景観」ということだったのでありますが、特に「文化的景観」という部分があいまい過ぎるというユネスコからの指摘がございまして、新しい推薦書では、タイトルが非常に具体的になっております。

それで、前の推薦書では「浄土思想」という言葉と直接にはなかなか結びつかない資産を構成資産に数えておりましたのですけれども、そういう部分にも問題があるというユネスコからの指摘を踏まえまして、構成資産を中尊寺、毛越寺、それから観自在王院、無量光院、金鶏山、柳之御所遺跡に絞り込んであります。

名称でございますけれども、日本語訳では「仏国土（浄土）」などという、何かよくわか

らないのではないかという御指摘をいただくのでありますけれども、推薦書は、英語版がもとでございまして、英語版ではこういうタイトルになっております。括弧の中に浄土という言葉が、日本語版ではそうなっているのであります。英語版では御覧のようなタイトルでございまして、こういう英語にするための日本語が「仏国土（浄土）」という日本語表現だというふうに御承知おきください。

構成資産でございまして、平安時代の平泉の想定図に構成資産を重ねたものがこれでございます。基本的には中尊寺、毛越寺、観自在王院、無量光院というお寺、それに金鶏山、そして平泉の政治、文化の中心的な機能を果たした柳之御所遺跡という形で構成資産の内容をすっきりさせたというのが今回の新しい推薦書の大きな特徴だろうというふうに思います。

イコモスから前回登録延期になったことにつきまして、さまざまな注文が実はついておりました。主な注文、これを4項目に分けてリストアップしております。このような助言を受けて新しい推薦書となったということでございますので、新しい推薦書は前回イコモスからいただいた重要な指摘と申しましうか、助言と申しましうか、それを踏まえているわけでありまして、私個人の気持ちといたしましては、これだけ助言を受け入れたのだから、それをバツということはないだろうというふうに思っている次第でございます。

そのようなことございまして、平泉は今回は世界遺産登録が実現するだろう、そういうことを強く期待しているわけでございます。

一体平泉とは何なのだと、ユネスコに向けての平泉、これはもうこのスライドの向かって右側の1番の部分にもございまして、特にすぐれた建築や庭園群、これは仏国土というか、浄土を象徴的に表現した、すぐれた作品なのだと、これが世界に向けての平泉の売りでございまして、このポイントは決して間違いではないわけです。言ってみればグローバル版の平泉の特徴というのはこれに尽きるということになるのだろうと思うのですけれども。

岩手県民にとって平泉とは何であるか。このスライドの向かって右の1番、すぐれた建築、すぐれた庭園群、浄土が象徴的に表現されている優秀な芸術作品。これは、地元岩手県民にとってはそんなことはわかり切っている。もっと具体的に岩手県民にとって平泉とは何なのだと、そういう説明がないとなかなか平泉を応援しようと思っても親身になって応援できないではないか。そんなこともあるやと思ひまして、ちょっと平泉の中身についてお話し申し上げようというふうに思います。

まず、これは平安時代の東北地方の歴史地図をスライドに出したわけでございますけれども、福島県から宮城県、岩手県まで平安時代においては陸奥国という一つの国、大変広い国だったわけです。この広い陸奥国は、基本的に二つの部分に分かれておりました。その一つは、宮城県の多賀城、その多賀城に陸奥国の国府、つまり陸奥の国全体を統べる役所がございました。その多賀城にありました国府が直接に管轄する範囲、それは基本的には宮城県までです。厳密に申しますと一関がそちらに入るようなのであります。

その多賀城にありました陸奥国の国府と並ぶもう一つの政治、文化の中心というのが実

は岩手県にあったということがとても大事なのであります。坂上田村麻呂のときに、御承知のように奥州市の水沢、佐倉河というところに胆沢城というお城が設けられました。そのお城に鎮守府という役所が置かれて、このスライドの境界線、青い細い線で示してありますが、この境界線以北をこの鎮守府という役所が、これが統括いたしました。ですから、古代の陸奥国には政治、文化、軍事の中心は二つあったということになるわけです。

多賀城と並ぶもう一つの政治、文化、軍事の中心は岩手県にあったということがまずは大事なわけでありまして、それで多賀城が管轄する範囲と胆沢城にありました鎮守府が管轄する範囲はそれぞれかなり独立した存在でありました。したがって、普通であれば国境に設けられる関所というものがこの二つの役所がそれぞれ統括する範囲の境界線上に関所まで置かれていたということになるわけです。この衣の関とか衣川の関と呼ばれるこの関所は当時大変有名でございまして、清少納言の枕草子にも全国の有名な関所の一つとしてこの衣の関あるいは衣川の関が登場するということになっております。

さて、多賀城と並ぶもう一つの政治、文化、軍事の中心の胆沢城というのはどこにあるのか。この写真で御覧いただきますと奥州市水沢区の佐倉河というところ、ちょうど胆沢川と北上川が合流するところ、そこに国指定史跡の胆沢城跡がございまして。この写真だけではよくおわかりにならないと思いますので、これに当時の胆沢城をスライドさせてみますとこのようになります。

これが多賀城と並ぶ東北地方のもう一つの政治、文化、軍事の中心だった。これは、岩手県にとって、あるいは北東北にとって非常に重要なこととございまして。東北地方の政治、文化、軍事の中心は多賀城だけだったのではないということもまずは御理解いただきたい。

そして、実は平泉藤原氏は、系図の上では安倍氏や清原氏の血筋を引いていることになっておりますが、特に安倍氏というのはこの胆沢城に置かれた鎮守府という役所において地元採用組ながら先祖代々この胆沢城に置かれた鎮守府に勤務いたしまして、次第に実力を高めていった豪族だった、そのところが平泉の成り立ちを考える上で非常に重要なこととございまして。

この鎮守府という役所でございましてけれども、まず第1には、坂上田村麻呂のときに初めて朝廷の直轄支配領域に組み込まれた部分、これは実は盛岡市以南ですけれども、その盛岡市以南の部分の支配する、これが鎮守府という役所の大変重要な役割だったのであります。あわせて盛岡以北、岩手県北、青森県、そしてさらには北海道をも含む北日本世界に対して朝廷の影響力を行使する、別の言い方をすればその北日本世界の住民の人たちとさまざまな形の接触交流を行うという非常に重要な役目が鎮守府にはあったわけです。

それを鎮守府の実力者安倍氏は、そういう任務を具体的にこなしていたということになるわけでありまして、そういうことから鎮守府という役所は、決して朝廷の直轄支配領域だった盛岡市以南の人たちだけにとっても意味があるものではなくて、北東北から、さらには北海道まで含む北日本世界全体の人たちにとっても非常に重要な施設であったということになります。

今岩手県は、岩手県だけではなくて北東北三県あるいは北海道をも含む北日本世界の一員として動いていこうという、そういう形がとられつつあるというふうに承知しておりますけれども、そのような動きの源流は、実は胆沢城に置かれた鎮守府にあったというようにまずは御承知おきいただくといいのではないかと思います。

それで、鎮守府という役所の重要な任務として、東北地方の名産でありますところの砂金や馬などを確保する。確保して、それを京都に提供するという重要な任務があったわけですが、さらに砂金や馬だけではなくて、北海道も含むさまざまな北方の産物を入手して、それを京都に提供するという任務がございました。このスライドにありますのは、これは平安時代にある皇女様のために皇女様の家庭教師役の人がつくってあげた単語帳なのでありますけれども、その単語帳を見ますと京都の身分の高い人はちゃんと「クマ」と「ヒグマ」の区別を知っていた。あるいはこれは「アザラシ」と読むわけですが、あるいはこれは「アシカ」と読むわけですが、アザラシやアシカという北の世界の、もちろんこれは毛皮でございまして、そういうものが京都の身分の高い人の身の回りにあったということなのです。

こういったようなものを調達するということが、これが鎮守府の主な役目、鎮守府の実力者でありました安倍氏の役目ということであったわけでありまして、安倍氏の後継者でありますところの平泉藤原氏の手元にこういう北の世界の特産物が豊富にあった、もちろん砂金や馬もあったわけですが、砂金や馬のほかにこの北の世界の特産物が豊富にあった。これが平泉藤原氏の実力につながっていくわけでありまして。

今までお話したこと、これをなぞりました。安倍氏は鎮守府という役所の地元採用組ながら幹部として着々と力をつけていって、最終的には鎮守府という役所を実質的に握ってしまった存在だったということになります。そして、系図的に申しますとこの安倍氏の系図の流れの中に平泉藤原氏の初代清衡以下が位置づけられているというになるわけでありまして。

本当に安倍氏の力が北東北や北海道に及んでいたのか。そのことを少し具体的にお話し申し上げてみたいと思います。前九年の合戦のさなかであります、1057年というときに、源氏の将軍は安倍氏の力をそぐために青森県東部一帯を、これを支配しておりました安倍富忠という人物に働きかけて、寝返らせたという事件がございました。青森県東部を握っていた人物の名前が安倍富忠であるわけでありまして、この安倍富忠という人物が有名な安倍貞任や宗任の縁続きであるのか、それとも安倍氏の力が青森県地方まで延びたということで安倍氏の一族に取り込まれた地元の豪族なのかについては議論があるにしても、この青森県東部を握っていた人物が安倍という名前であったということ自体が安倍氏の力が決して盛岡市以南にとどまっていたわけではない。少なくとも青森県地方まで延びていたということの何よりのあかしであるということになろうかと思います。

そして、安倍氏が没落した後、鎮守府の実権を握った清原氏。そして先ほどの系図にもございましたように安倍氏、清原氏双方の血の流れを受け継いだ平泉の藤原氏の手元には当

然のことながら北方の産物が豊富にございました。そのことを具体的に物語る話がございます。

毛越寺の御本尊を平泉藤原氏2代の基衡が京都の有名な仏師に発注した時の話であります。基衡は、京都の仏師にそのお礼として砂金あるいは馬のほかには何とアザラシの皮あるいはワシの羽根というような北方の産物を豊富に用意したという話が伝えられております。平泉藤原氏の手元には北方の産物が豊富にあった。その北方の産物とはどんなものかということ、これをスライドにあらわしてみますとアザラシがあり、アシカがあり、そして毛皮獣としてのテンがあり、もちろん東北の特産の砂金や馬があり、漆があり、こういうものが平泉藤原氏を支えていた。やはり特に注目したいのは、東北部や北海道の特産品が平泉藤原氏を支えた産物の中に豊富にあるということでございます。

実は平泉藤原氏というのは、北東北から北海道という地域に目を向けた、そういう政治姿勢を持っていたのであります。スライドに出ましたのは中尊寺に所蔵されております中尊寺落慶供養願文と呼ばれている資料でございます、いろいろ皆様も御存じだと思います。清衡の平和思想などということがよく言われます。そのよりどころもこの資料なのであります。しかし、どんなことが書いてあるのかということ、少し見てみますと、こんな文字が並んでいる。しかし、これだけではわかりにくいことから、これを現代語に改めたものがこれでございます。

平和思想と並ぶ平泉藤原氏のいわばモットー、これは清衡の考えであります。自分は要するに蝦夷の大族長なのであるというような意味のことを2カ所にわたって述べております。そして、清衡は、自分が平泉の主になって以来、出羽や陸奥という東北地方の人たちが風に草がなびくように自分に従ってきたのは言うまでもなく、ここでは肅慎(しゅくしん)とかゆう婁(ゆうろう)という少し中国的な言葉を使っておりますが、これは実質的には北海道の住民のことです。北海道の住民まで太陽に向かう葵のように自分になびき従っているのだと。これは、明らかに平泉藤原氏と同時代に源氏や平家が朝廷から侍大将に任命されて、その侍大将という地位をてこに、全国に号令しようとしたというのとは異なる、北方世界に目を向けた政治姿勢であるという何よりの証拠でございます。

平泉藤原氏は、最終的には東北地方南部も支配する権限を得て、全東北の王者になりましたけれども、平泉藤原氏の本来の顔というのは安倍氏や清原氏から受け継いだ東北北部を支配し、北海道をも視野に入れた北方世界の王者である、こういうスタンスこそが平泉藤原氏の基本的なところにあるということになるわけです。

そのような平泉藤原氏の姿勢というものは、これは源氏にも平家にも見られないものであった。そして、平泉藤原氏は、平泉藤原氏自身は源頼朝によって滅ぼされるわけですが、その平泉藤原氏がしっかりと形づくっておりました東北北部、そして北海道も視野に入れ、そういう東北北部や北海道という北の世界とのさまざまな接触交流、そういう財産を実は源頼朝は平泉藤原氏を滅ぼすことで手にいたしまして、それが鎌倉幕府を、御承知のようにあのような強固なものにした。そして、平泉藤原氏は砂金や馬だけではなくて、先ほど

来申し上げておりますような北方世界のさまざまな産物を安定的に京都に送るということと引きかえに、実は京都の朝廷から一定程度に独立した立場で振る舞うということを承認されていた存在である、いわば京都から見て東北地方は辺境ではありますが、辺境であるがゆえに成り立つことができた平安時代における唯一の地方政権であるということになります。

平泉は東北の都であるなどと申します。よく仙台を杜の都などと申しますけれども、ここで言う杜の都の都という意味は単なる県庁所在地という意味であります。しかし、平泉藤原氏について、平泉は東北の都であるというふうに表現したときは、それは単なる全国にたくさんあった平安時代の県庁所在地という意味ではなくて、全国唯一の地方政権の都という意味であったということになるわけであります。

そういう意味で、平泉という都を持っていた岩手県、その平泉の主、平泉藤原氏のモットーは、これは東北北部から北海道という北日本世界に目を向けていたそういう北方世界の王者、こういうあり方というのはやはり岩手県民にとってぜひ知っておいたほうがいい、平泉の売りは岩手県民にとってはこのところだろうと私は思うわけであります。

そして、そのことを踏まえまして、ちょっとだけ私の夢を語らせていただきたいと思えます。ここに写真が出ましたのは、有名な岡倉天心であります。岡倉天心は、明治30年という大変古い時代に東京や京都、奈良に国立博物館は既にある。だけれども、そのほかに少なくとも太宰府や広島県の厳島、安芸の宮島ですね、それから鎌倉や平泉には地方規模ではあるけれども、国立博物館に匹敵する施設が必要であるということを説いております。この岡倉天心の夢、この夢が近年太宰府において九州国立博物館として結実しております。

この岡倉天心の夢は私の夢でもあるわけでありまして、平泉にもそういう施設があったら、今お話し申しましたように北方世界に目を向けた平泉藤原氏、そしてその平泉藤原氏の源流となった胆沢城に置かれた鎮守府という役所の果たした役割、これを日本国内外の多くの方々に説明できるのではないかというふうに考えるわけであります。蛇足でございますけれども、私はかつて宮城県の多賀城にあります東北歴史博物館という博物館の館長を拝命しておりました。東北歴史博物館などと名前は立派であります、これは宮城県立の歴史博物館でございます、国から予算が来ているわけでも、人員が来ているわけでもございません。

この東北歴史博物館は、平泉のように中尊寺、毛越寺のような目立った観光地があるわけではないのですが、この博物館には数えようにもよりますけれども、年間10万人、15万人という方がお見えになります。そして、この博物館で展示されている、あるいは講座、講演等でお話をするのは、例えば縄文時代にさかのぼる宮城県の貝塚のことでありまして、岩手県や青森県、北海道の縄文遺跡のことは、これは説明されていない。平安時代の政治、文化の中心として、多賀城がいかに立派であったかということは説明されておりますけれども、先ほど来、お話をしたような胆沢城や平泉がもう一つの東北の政治、文化、軍事の中心であったということは説明されていないのであります。

東北歴史博物館を訪れる過半の方は、実は修学旅行生も含めて宮城県外の方であります。宮城県外の方が東北歴史博物館を訪れてお帰りになる。頭の中に焼き付けられてお帰りになるのは、東北の歴史というのは多賀城を中心とした、宮城県を中心とした歴史、これが東北の歴史なのだと、東北の文化なのだと、そういうことを強く印象づけられてお帰りになる。岩手県にもそういう施設があったらいいなど、これは岡倉天心の夢であり、私の夢でもあるということを最後に蛇足かもしれませんが、お話し申し上げまして、与えられた時間が来たようでございます。私のお話を閉じさせていただきます。ありがとうございました。

なお、蛇足でございます。私、最近この「平泉藤原氏」という本をつくりました。盛岡の新聞社に連載をした平泉に関する文章をまとめて一冊にしたものでございます。きょうお話し申し上げましたような事柄のポイントは、自己宣伝めいて失礼でございますけれども、こんなものにもございます。何かの折に参考にさせていただければということで、失礼いたしました。

○及川幸子委員長 工藤先生、大変貴重なお話をありがとうございました。

続きまして、当局から説明を求めます。

○中村文化財・世界遺産課長 それでは、私のほうから今後のスケジュール等について、お手元にお配りしております資料3に基づきまして御説明を申し上げます。

まず、先月までのところでございますけれども、推薦書の暫定版を作成してございまして、これにつきましては9月29日にユネスコの世界遺産センターに提出し、受理されたところでございます。現在はこの推薦書の正式版の完成に向けまして作業を続けてございます。具体的には、推薦書の文言あるいは添付資料の精査あるいは事実関係の再確認などを行っているところでございます。今後も必要に応じまして、推薦書作成委員の先生方から御意見を賜りたいと考えているところでございます。

また、来年1月には推薦書正式版を完成させまして、2月1日が締め切りとなっておりますので、それまでにユネスコの世界遺産センターに提出する予定でございます。

推薦書提出後の予定でございますけれども、来年8月ごろ、イコモスの現地調査を受けることになろうかと思えます。前回で言うと4日間ほどの日程で調査が行われたところでございます。括弧内はその前回の動きを参考にしてシミュレーションしたものでございますけれども、現地調査の折に調査員からいただいた質問あるいは追加の資料、そのようなものを求められて提出しておりましたし、イコモスからも推薦書についての質問がございまして、それについて回答しているというような動きがございまして、これらのことも今想定されているところでございます。

そして、平成23年の5月ごろにまたイコモスからの勧告をいただき、それを受けて平成23年の7月ごろ、これはバーレーンが予定されてございますけれども、第35回の世界遺産委員会で登録の決議をいただきたいということで今進めているところでございます。

以上でございます。よろしく願いいたします。

○及川幸子委員長 これより質疑、意見交換を行いたいと思えます。ただいまの工藤先生の

お話、教育委員会の説明に関し、質疑、意見等はありませんか。

○伊藤勢至委員 先生の御講演拝聴いたしましたけれども、ちょっと時間がないということで、平安時代からお始めになったかと思えますけれども、梅原猛氏の本を読みますと、我々のこの地には安倍一族、その前に蝦夷と言われる、中央から見ればまつわぬ人々がいったと。その前には、あるいはアイヌ民族が先住民族としていたのかもしれない。そういう混血が起こって今につながってきているというところから、この東北を説いていきませんと、常にこの日本の中央からこっちを見た、攻めてきたという目線しかないのではないかなというふうに思っております。

金色堂のわきに決して人をくさしたことがなかった宮沢賢治が頼朝のことを大盗人と言ってくさしているわけですが、これは自分の覇権を追い求めて鎌倉から来て藤原文化を滅ぼした大盗人である。だけれども、金色堂にはさすがに立派さに驚いて手をつけずに帰ったと、こういう碑があるわけでありまして、この平泉は以来、先生のお話にもありましたけれども、三十数年、前九年、後三年の役を含めて戦いのない地域になった。これ以上この地では戦を起こしてはだめだ、鳥獣から人間まで命を奪ってはいけないということで、それがイーハトーブの東北の心というふうになったと、むしろこれが私たちの岩手から日本の中央に発する根っこでなければいけないのではないかと、国内的にはでありますけれども。そんな考えを持ったりをしてその本を読んだのでありますが、先生の御本もぜひ読ませていただいて、比べさせてもらいたいと思うのですが、やはり物の根っこから語っていく中に我々の遠い血のつながりがあるのではないかなということを考えますと、時間がなくての途中からのお話だったかもしれませんが、その辺については先生はいかがお考えでしょうか。

○工藤雅樹講師 実は先ほどもちょっと触れましたように、岩手県は秋田県、青森県、北海道とともに縄文遺産を世界遺産にというもう一つの動きを進めていると承知しております。

その東北北部、北海道という北日本世界の縄文文化というのは、これは非常にやはり日本全体に縄文文化が広がっていたわけではあります、非常に風格のある縄文文化でありまして、誇るべき部分がたくさんある。だから、世界遺産候補なのでありますけれども、その風格がある北日本世界の縄文文化を、これを生み出した風土、その北日本世界の風土というもの、これが平泉藤原氏によって立つ基盤でもあったということなのです。その平泉藤原氏はちょっと見ますと京都の文化を、いわばあさったというような、そして北日本世界には余り目を向けていなかったのではないかという見方がどちらかといえばこれまで主流だったのかもしれませんが、そうではないのだと。平泉藤原氏は、あるいは平泉藤原氏の先輩としての安倍氏や清原氏は北日本に目を向けていた。その北日本に目を向けていたという、そういういわば政治姿勢が結実したのが平泉藤原氏なのだ。そして、それを頼朝は継承したのだと。平泉藤原氏がつくり上げたものがなければ、実はあの長期にわたって鎌倉を拠点に力を振るった鎌倉幕府もあり得なかった。だから、平泉藤原氏は、血の上では頼朝に滅ぼされたのだけれども、頼朝は平泉藤原氏がつくり上げたものを受け継ぐことによって、鎌

倉幕府が鎌倉幕府たり得た。そういう意味で、平泉藤原氏の遺産というものは決して文治5年で消え去ったのではない、そのように考えております。

○伊藤勢至委員 ありがとうございます。どこに誇りを持つかの部分だと思うのですが、改めてお伺いしてよかったですと思っています。

我々はアテルイで敗れて、安倍一族で敗れて、それから藤原三代がこれまた中央にやられて、おまけに戊辰戦争でもやられてしまったという、4連敗の思いが中央に対してないわけではないのだと思っていて、まずここを払拭するような著作をひとつお願いしたいというふうをお願いをして終わります。

○新居田弘文委員 推薦書の関係なのですけれども、前回から今回に変わる過程の中で、白鳥館遺跡あるいは衣川の長者ヶ原廃寺跡等は除外されました。地元にとっては非常に残念な部分がありますけれども、引き続きその環境整備とかいろいろな取り組みをしているわけですが、その辺について、先生から地元の今後のあり方といいますか、どういう形で取り組めば一番いいのかなということを御指導賜ればと思います。

○工藤雅樹講師 わかりました。実は前回の推薦書において構成資産の中に含まれておりました一関市の骨寺村荘園遺跡、それから奥州市の白鳥館遺跡と長者ヶ原廃寺、これは浄土思想ということとのかかわりが余り表面には出ていないのではないかというユネスコの指摘を受けまして、今回の新しい推薦書では、構成資産から外れているわけでありまして、ただし、実はこれまでの新しい推薦書がこのような形になったというその流れの中で、世界遺産という制度そのものの中に第2次、第3次というような形で、第1次ときには世界遺産の直接の対象にならない資産を追加できるという、そういうシステムがあって、ついてはそういう制度を活用できないのかということが問題になりまして、最終的には国や県がその制度を、これを活用して、今回については残念ながら見送りになった一関市及び奥州市の三つの遺産、それを将来的には世界遺産に含めるという方向性でさまざまな形で援助する。それを国のしかるべき立場の方が公的に現地において約束してくださるということまでこぎ着けることができました。

したがって、この際何が問題であったのかということ、浄土とのかかわりが余り強くはないということとあわせて一関市及び奥州市の三つの遺産については調査研究をもう少し進めるべきだという指摘も実はあったわけでありまして。そのこととのかかわりの中で、国や県のしかるべき方が国や県としても一関市及び奥州市の三つの資産の調査研究にもそれなりの援助を惜しまないということも約束して下さったということのようでございますので、まずは地元の方々といたしましては、この三つの資産についてのいわばこれは価値がないものとして見捨てられたのではないのだということを再認識していただいた上で、この三つの資産についてそれぞれ調査研究をこれまで以上に進めるという方向で動いていただければというふうに思うわけでございます。

その調査研究をさらに進めるということになれば人的に、あるいは予算的に一定程度の配慮も必要ということにもなるわけでございますから、皆様方におかれましては、そういう

部分につきましても格別な御配慮をいただければというふうに私からもお願いする次第でございます。

○及川幸子委員長 ほかにありませんか。

（「なし」と呼ぶ者あり）

○及川幸子委員長 ほかにないようですので、本日の調査はこれをもって終了いたします。

工藤先生、本日は本当にありがとうございます。工藤先生は盛岡にお宅があるのですが、きのうの台風で被害を相当心配されて早目にきょうは仙台からいらしたそうでございますが、瓦が二、三枚飛んで業者さんをお願いしてきたとおっしゃっていました。そしてまた、工藤先生のお母様が工藤巖様といとこ同士ということで、大変岩手県にはゆかりのある存在でいらっしゃる。先生、私たちの会のためにきょうは本当にありがとうございました。もう一度大きな拍手をお願いしたいと思います。

教育委員会の皆様も退席されて結構でございます。

委員の皆様には、当委員会の運営等につきまして御相談がありますので、しばしお残り願いたいと思います。

（工藤雅樹講師及び教育委員会職員が退席）

○及川幸子委員長 次に、次回の委員会開催についてであります。次回の委員会開催については世話人会で別途協議し、決定したいと思いますが、これに御異議ありませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○及川幸子委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。なお、詳細については当局に御一任願います。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。ありがとうございます。